

「This is Home」

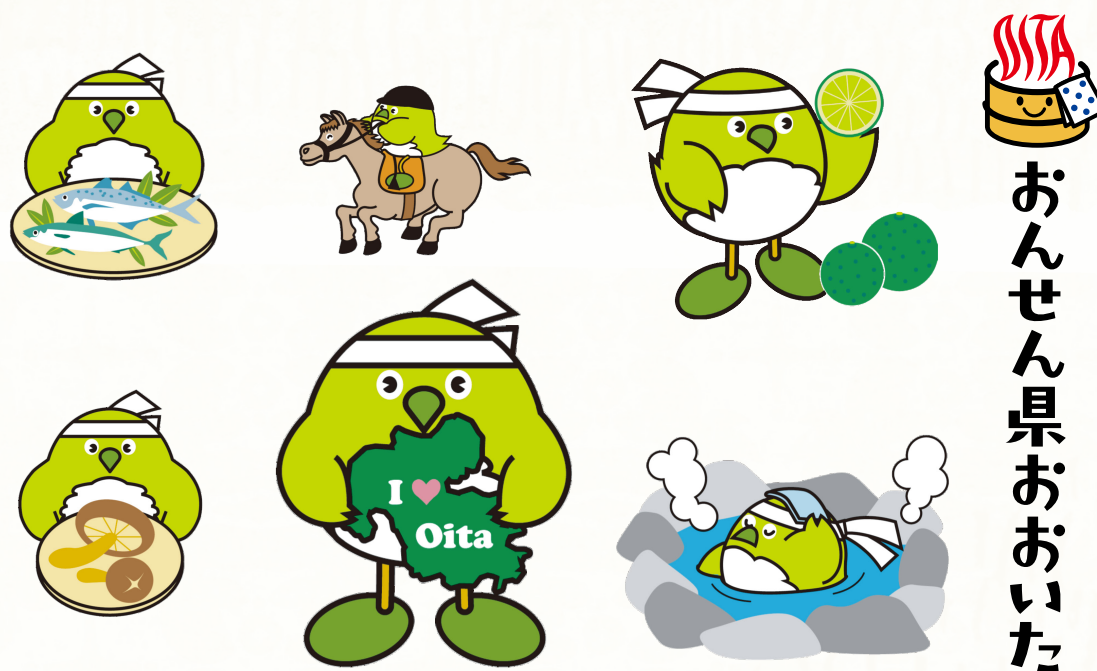
齊藤華奈実

大分大学医学部皮膚科学講座

私は大分大学医学部（旧大分医科大学）に入学してから20年以上大分県に住んでいるが、生まれ故郷である熊本県北部の温泉地の地方訛りがとれず、患者さんには「先生は、大分県出身ではないですね」といまだに言われる。その温泉地は久留米市まで車で30分くらいに位置しており、かつて久留米大学医学部にも合格したが、結局、大分大学医学部への進学を選んだ。大分県を選んだ理由の1つは「温泉」の名産地という雰囲気が、自分の生まれ故郷にどこか似ていたからかもしれない。私は熊本城跡にある女子高（現在は共学）の出身で、そのころは読書が好きな文系女子であった。中学2年生のころ病気で半年ほど休学し、その病気が高校3年生のころ再発したときに、当時福岡県で歯科医院を経営していた叔母が私に理転を勧め、福岡県の予備校の医学部進学コースに入れてくれた。いま思えば叔母は、医者になれば、もしまた病気が再発しても周りにいる医療スタッフに助けてもらえると考えたのかもしれない。あれから20年以上の歳月が経ったが、幸い病気は再発せず、元気に暮らせている。

私が医学部生時代に海堂尊氏の小説がベストセラーになり、海堂氏のファンになった。いまもシリーズを何度も読み返しているが『ハリー・ポッター』シリーズ同様に、何度読んでも新しい発見があり、海堂氏が張り巡らせた迷宮のような伏線に何年も経ってから気がつき驚くことがある。

外科医から病理医になり、さらに小説家になった海堂氏の作品は、ドラマ化・映画化を経て広く愛されているが、2024年七夕の日に、海堂氏の小説を原作とした医療系テレビドラマ『ブラックペアン シーズン2』が6年ぶりに日曜劇場で始まった。原作の舞台は20年以上前だが、医療の本質を問うテーマは現在も色褪せず、魅力的な俳優陣の力もあり、視聴率は高いようである。このシリーズの登場人物の多くは、作者の学生時代の友人や現役医者時代の仲間がモデルになっているとのことであり、ユニークで魅力的な登場人物



がたくさん出てくる。その中のとある登場人物の座右の銘の1つは「病気を経験したことのある医者には独特の優しさと粘り強さがあり、信頼できて頼りになる」であり、海堂シリーズにはその筆力により優しく粘り強い医者やコメディカルといった人物たちが生き生きと描かれている。そして幸いに、私の周りにも、優しく粘り強い医者やコメディカルの仲間がたくさんいる。

1961年から1966年まで放映され大人気だったアメリカのテレビドラマの主人公である脳外科医のベン・ケーシーと同じ名前の可愛い猫が出てくる本邦の医療ドラマ『ドクターX』のテーマソングの中に『This is Home (ここが我が家)』（作・編曲：沢田完）という曲があるが、私にとって病院は家であり、居場所だった。私は、皮膚科の中でも、乾癬や自己免疫性水疱症など、内科系医師と連携しながら集学的な治療が必要な臨床免疫学の分野の疾患を専門としている。私の夢は、私の長年の外勤先である内科系総合病院の経営者のように、病院のワンフロアを自宅として、大学病院や基幹病院と上手に連携し、そこで海堂ワールドに出てくるような優しく粘り強い仲間たちと、最良と信じる医療を誇りをもって提供し続けることである。